

「気づく力」・「感じる力」を育む 「五感塾」のすすめ

人と情報の研究所

代表 北村三郎

「仕事力」と「人間力」

私はいすゞ自動車に35年間勤め、その間の大部分は教育担当として、新入社員教育、中堅社員教育、部課長教育などを手がけてきました。

定年退職してから現在までの12年間、ご縁があったいくつかの企業、労働組合などで「意識改革研修」などのお手伝いをしております。

私の経験では、「企業人教育」の一番の目標は、仕事に必要な知識、技術、技能を習得させることであり、マネジメント手法、コミュニケーションスキル、リーダーシップを含めた「仕事力」の向上であったと思います。

その一方、仕事力の土台である「人間力」の教育が取り残されてきたのではないかと考えています。

その理由としては、①長い間、企業経営が人間力よりは仕事力を求める傾向があったこと、②人間力は目に見えないので研修プログラムの開発が難しかったこと、③人間力の教育効果が企業経営の向上に結びつくという検証ができなかったこと、などが考えられます。

「人間力」という言葉を明確に定義することは難しいのですが、「知性（左脳）と感性（右脳）」、「知育（あたま）、徳育（こころ）、体育（からだ）」、「情（情緒）と理（合理）」のバランスがよい人は、人間力が優れていると、私は思います。人間力を磨

いている人は、学ぶ意欲にあふれ、いつも朗らかで人を元気づけるパワーが旺盛です。その人の周囲には、よい仲間が集まってくるような空気があります。

人間力は、特別な教育を受けなくても、誰でも持っているものだと思います。その人間力が、企業では仕事力の陰に隠れてしまい、なかなか表出できなくなっています。その主な原因は、行き過ぎた「目標管理」、「効率主義」、「成果主義」の蔓延という現代の風潮にありそうです。

このような危機感と問題意識を持つ、労働組合や企業の方々を試行してきたのが、人間力を向上させるための「五感塾」という学習方法です。

「五感塾」が目指していること

五感塾では、人間力のある人に接して、人間力のありようを五感で感じ、その力を身につけていきます。見るもの、聞くこと、感じるものごとのすべてが、学びのきっかけとなります。

人間力を養うために大切なことは、「よい話を聞く」だけでなく「やってみる」ことです。したがってプログラムの大部分は現地、現物を通じての体験学習になります。

「五感塾」は次の2つのことを目標にしています。いずれも知識の習得＝「知得」ではなく、身体に染みこませること＝「体得」を目指します。

■感じる力、気づく力を体得する



profile

1936年、東京生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。1961年にいすゞ自動車(株)入社。北米部長、事務合理化推進室長、(株)いすゞ能力開発センター社長を歴任。いすゞ自動車の再建にあたっては、風土改革の参謀役を務めた。1996年、定年退職後、人と情報の研究所を設立し現在に至る。著書に『窓際に立てば会社がよく見える』、共著に『心の革命』(ともに第二海援隊刊)がある。<http://www2.shizuokanet.ne.jp/sabu/>

学校教育では受験競争に勝ち抜くための知識修得(偏差値教育)を重視しています。そのため、学歴のある人の多くは「左脳(大脳新皮質)肥大、右脳(大脳辺縁系)縮小」というバランスを欠いた状態になっています。五感塾は、右脳の働きである「感じる力、気づく力」を取り戻してバランスを整えることを目的にしています。

意識を変えるために不可欠なことが「気づく」ことです。「気づく」→「気づいたことを意識する」→「意識したことを繰り返し実践する」というプロセスになりますので、まずは「気づき力」を体得したいのです。

■「学び方」を体得する

知的、精神的に成長するためには、「教わる」と「学ぶ」ことの両方が大切です。教わるためには先生(教師、師範、コーチ)の存在が欠かせません。しかし、学び方を体得できれば、先生がいなくても成長することができます。長い人生では自ら学ぶ時間が圧倒的に多いものです。学び方を体得できれば生涯、成長を続けることができるのです。

この五感塾という学習方法の根底には松下政経塾(松下幸之助塾主)の「万事研修」という教育観が流れています。

「万事研修」というのは、「見るもの聞くことすべてに学び、一切の体験を研修と受け止めて勤しむところに真の向上がある。心して見れば、万物ことごとく我が師となる。」という考え方です。

「五感塾」の特長

「五感塾」には次の7つの特長があります。この

7つはいずれも、従来の企業研修の常識を逆転させております。

①研修室から出て現場・現物を体験して学ぶ

研修室から出て、地域の現場に身を置き、その地域に伝わる伝統文化に触れて、体験を通じて学びます。たとえば農作業、芸能体験、料理づくりなどを行います。このような体験を通じて日本の伝統文化の素晴らしさを再発見します。

②一隅を照らす人から学ぶ

五感塾で大事にしていることのひとつに、「一隅を照らす人々」から学ぶということがあります。「一隅を照らす人々」とは、ごく普通の生活を送りながら、地域がよくなることを願い、地域のために働いている人たちのことです。「一隅を照らす人々」に接することによって安岡正篤氏の言葉、「有名無力、無名有力」の意味がよくわかりますし、最澄の言葉、「一灯照隅、万灯照国」を実感することができます。

③塾長がいない塾で学ぶ

五感塾は塾長がいない塾として運営します。五感塾に参加する一人ひとりが場と状況に応じて、誰でも塾長になるからです。

主催者は「五感力を磨き、人間力を育てる」という目的は意識しておりますが、具体的な教育の中身については意図を持っておりません。特定の価値観を押し付けたくないことと、参加者の関心と問題意識によって学ぶことは違って来る、と考えるためです。したがって、多様な要望に応えるべく、レクチャー、エンターテインメント、対話集会、実習、見学、交流会などたくさんの学習メニューを揃えます。

④「相互乗り入れ」、「切磋琢磨」で学ぶ

参加者は、お年寄りから子どもまでという、社会の縮図というべき環境の中で学びます。最近、ご

特集 気づく・感じる「人間力」を育む

夫婦やお子様の参加を奨励するようになりました。お子様と対話をして、お世話をすることにより、人はとても優しくなれるからです。もちろん、個人での参加も歓迎しています。

単一の組織で開催するだけでなく、企業、行政、労働組合、協同組合、NPO法人の相互乗り入れを大切にします。異なる組織風土や業種の人々が場を共有することで、ものの見方・考え方の幅が広がり、気づきの機会が一段と増えていくのです。

⑤地域プロデューサーが主体でプログラムを創る

五感塾は、「地域プロデューサー」のご尽力により地域の有志の方々から支援をいただきながら運営しています。地域プロデューサーは、地域に伝わる独自の文化と「一隅を照らす人々」を発掘し、主催者と相談しながら研修プログラムを組み立てます。

主催者は現地を訪れて下見を行い、現地でお世話になる方々との人間関係をつくっていきます。

⑥参加者が「準備、実行、後始末」の

プロセスに関わる

参加者には可能な限り「準備、実行、後始末」のプロセスに関わっていただきます。当日だけの参加者には会場づくり、食事の後片付けなどをお願いしています。五感塾のすべてのプロセスが「衆知を集める」という考え方で運営されます。「後始末」としては会場の後片付けはもちろん、お世話になった人たちへのお礼状、感想文の作成、レポートの編集と発行、郵送などを行います。

参加者全員が「お客様」ではなく「当事者」になっていただくことが大切だと考えているからです。

⑦実費の全員負担、会計の公開

五感塾は、利益を出す研修ビジネスとしては考えておりません。ゲスト講師への謝礼も薄謝でお願いし、必要経費は全員の割り勘で運営します。また参加者に収支明細を公表します。

五感塾への参加費（交通費、宿泊費を含む）は組織が全額を負担、組織が一部を負担、参加者が全額を負担するという3つのケースに分かれています。

「参加費を組織が丸抱えするのではなく、少しで

も身銭を切って学ぶ」という感覚が大切なようです。

参加者に守っていただきたいこと

次の2つは参加者に必ず守っていただきたいことです。五感塾の実践を重ねた結果、この2つがもっとも大事であるということがわかってきております。

■積極的に人に関わる

参加者には、「相互学習」、「切磋琢磨」という姿勢を求めています。五感塾は相互学習ですので、初めて出会った人に積極的に関わっていかないと学習効果が薄くなります。

特に「自己開示」ができると回りの人たちとすぐに心をつなげることができます。「自己開示力」というのは、格好をつけずにありのままの自分を他人に見せることができるワザのことです。

■マナーを大切に

五感塾は地域の方々の厚意に支えられて運営しますから、特に参加者の「マナー」は五感塾を支える重要な条件になります。マナーがよければ地域から歓迎され、逆にマナーが悪いと継続が難しくなります。

マナーの中でも、大きな声で元気にあいさつする、人の話にはしっかり耳を傾ける、帰った後を汚さないという3項目を徹底するようにしています。

これからの五感塾

過去10年間の実践をふまえて、次のような新しい動向と今後への課題・希望が生まれてきました。

■実施地域の選定

これまで五感塾は白杵、小布施、沖縄、岡崎、佐渡、奄美、伊東、阿波、米沢、海士で実施してきました。五感塾では、なるべく都市化が進んでいない地域、地域共同体の雰囲気が残っている地域を候補地として探しています。すでに数カ所の候補地が浮

かび上がっていますので、関係者の皆様の協力を賜りながら、具体化していきます。もちろん、今までの五感塾も、さらに改善しながら継続して実施していきます。

■主催者のこと

五感塾はイオンリテール労働組合、帝人グループ、再生日本21などの団体がそれぞれに主催してきましたが、これからはもっと多くの組織に主催していただきたいと思っています。そして主催団体の相互乗り入れを基本にしながら普及していきたいと思いません。

従来、主催団体は企業などの組織が担当してきましたが、今後は地域が主催する五感塾も展開していきたいと思っています。現在、「奄美五感塾」、「海士五感塾」、「浪花五感塾」、「富山五感塾」、「上島五感塾」などの可能性を現地と相談しております。

■五感塾ネットワークフォーラム

主催団体の情報交換を目的にした「五感塾ネットワークフォーラム」を2009年8月1～3日まで長野県小布施町を中心に実施しました。

そこには五感塾に関心を寄せている120人の皆様と、奄美、佐渡、海士、米沢、小布施から地域プロデューサーも参加し、活発な情報交換を行いました。「五感塾ネットワークフォーラム」には、多様な出会いの場をつくり、「ヒューマンネットワーク」を構築していく効果もあるようです。今後も「五感塾ネットワークフォーラム」を適宜、開催していきます。

■「ミニ五感塾」という展開

五感塾を体験した参加者の皆さんには、ご自分の地域でいろいろなカタチの「ミニ五感塾」を工夫し、実践していただきたいと思いません。

よく探してみれば、地域には必ず「一隅を照らす人」が存在し、また紹介したい地域の文化が存在します。それらに光を当てながら、五感塾のプロデュースをしていただくことをお勧めしております。「ミニ五感塾」を企画、運営することが、新しい出会い、発見、学びにつながっていきます。

また、五感塾の実践プロセス「準備・実行・後始末」のすべての場面に関わることで、より多様な学びが可能となります。

「五感塾」を体験した志塾の有志が自ら発案、プロデュースして「吉田松陰の江戸での足跡をたどる」、「高野山で空海に学ぶ」、「落語の師匠を招いて人情の機微を学ぶ」、「山古志から学ぶ震災からの復興と地域活性化を考える」、「松代で大本営の遺跡を体験する」、「釜ヶ崎で生活している人たちに触れる」というミニ五感塾を開催しました。

また、イオンリテール労働組合の「五感塾」を体験した一人の組合役員は自分の発案で「筑波山五感塾」、「佐原五感塾」、「秦野五感塾」、「白根五感塾」、「川越五感塾」を企画し実行しました。

最近では相撲の玉の井部屋と提携して「相撲部屋ミニ五感塾」を実施するなど、面白い動きも出ています。

■開催地へのご恩返し

五感塾には、地域を訪問し学ぶ人々だけでなく、開催地で五感塾を支える地域プロデューサーや協力者にとっても収穫を生む可能性があります。

五感塾は、自分たちにとって「普通」、「当たり前」のことを、来訪者の新鮮な視点から見つめ、地域の文化や産業の価値をとらえ直す機会ともなります。そこで「一隅を照らす人々」が誇りや自信を新たにした場面は少なくありません。また五感塾でのご縁をきっかけに、農家と小売店との間で新たな取引が始まった事例もあります。

五感塾に学び、人間力を高めていった結果として、お世話になった開催地の方々へ文化・経済両面からご恩返しをすることも可能なのです。

■これからの期待

五感塾は小さな活動ですが、この小さな一石を社会という大きな水面に投じることによって、その波紋があちこちに広がっていくことを願っています。さまざまな可能性が芽生えつつあることを実感しており、今後の展開が大変楽しみです。

(きたむら さぶろう)